『総合政策論叢』第21号（2011年３月）
島根県立大学　総合政策学会

＜研究ノート＞

大学と地域をつなぐコーディネート機能の構築

―「島根県立大学地域コーディネーター」配置の社会実験を手がかりとして―

藤　本　　穣　彦
田　中　　恭　子
橋　本　　文　子

はじめに：一筋縄ではいかない、大学と地域との連携・協働
１．地域コーディネーターの配置
(1)地域コーディネーター配置の背景
(2)地域コーディネーターの職務形態
(3)どのような人物が、地域コーディネーターとして働いているか――共通点を求めて
２．地域コーディネーターが拓いた「新しい共同性」――フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワークを事例に
(1)フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワークの全体構想
1)テーマ別グループ学習
2)弥栄フィールドワーク学習内容
(2)弥栄フィールドワーク実践のケーススタディ
1)ふるさと体験村春祭り（2010年５月４日・祝）
2)弥畝山散策（2010年６月12日・土）
3)「農事組合法人ビゴル門田」訪問（2010年７月３日・土）
4)合同報告会（2010年７月22日・木）
３．大学と地域の連携を構築する際の調整課題
(1)大学側の調整過程
1)具体的な企画調整段階での課題
2)大学と地域の関わり方の根本的な課題
(2)地域側の調整過程
(3)課題を乗り越えるための工夫
1)大学教員側の視点から
2)地域コーディネーター側の視点から
3)2010年度秋学期の工夫
４．地域の学生への期待と学生の地域への期待をつなぐ
(1)地域住民の学生への期待
1)事例：小角集落秋祭り

2)地域住民は学生に何を期待しているのか

(2)学生は何を感じ、何を学ぶのか：「フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク」を終えての学生の感想、意識の変化についての所見

(3)小括

1)チームによるコーディネート体制の重要性

2)地域再生支援員との綿密かつ日常的な連携

むすびにかえて：大学と地域との協働による地域支援人材育成拠点形成へ向けて

はじめに：一筋縄ではいかない、大学と地域との連携・協働

少子高齢化のもとで大学を取り巻く環境が激変している。とりわけ、過疎・高齢化が進む地域にある地方大学にとっては、経営体として生き延びていく生存戦略を早急に構築し、地域に根ざした個性のある大学構想を打ち出すことが求められている。

そのような激動のなかで以前以上に重視されるようになったのが、「地域」との関係である。「地域は、大学にとって研究、教育、地域活動、あるいは経営のどの面からみても、一方では避けて通れない存在であり、他方でまたとない拠りどころとなる宝庫でもある」（小松, 2007: ⅳ頁）や「地域が大学を育て、大学が地域を育てる」（大宮・原田, 2007: ⅳ頁）等の指摘に代表されるように、地域再生戦略と大学の生存戦略を協働で歩む道が、リアリティをもって模索されている。

しかしながら、大学と地域との連携や協働は、一朝一夕に出来るものではなく、組織文化やメンタリティも異なる。では、いかにして連携や協働を実現しうるのか。また、その際の障壁、課題となるものは何か。

本稿では、島根県立大学と島根県中山間地域研究センター、そして浜田市弥栄自治区との協働で行なわれている（独）科学技術振興機構社会技術研究開発センターの研究開発事業「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷』づくり」（研究代表：藤山浩）（以下、郷づくり事業）における「島根県立大学地域コーディネーター」配置の社会実験を検証する事をつうじて、この問いに挑みたい。

郷づくり事業では、大学と地域との「つなぎ役」として、「地域コーディネーター」を島根県立大学内に配置する社会実験が行なわれており（2009年９月～）、初年度教育科目である「フレッシュマンセミナー」のフィールド編を、浜田市弥栄自治区の地域住民との連携・協働で企画・実施してきた（2009年秋学期～）。

本稿では、2010年度春学期に開催されたフィールドワークを事例として詳細に検討するなかで、大学と地域の連携を行なう際に生じる課題、必要なプロセスと人的・社会的コスト等を明らかにし、大学と地域とのコーディネート機能をいかにして構築しうるのか、道筋を示したい。

本稿に先行して、筆者（藤本・田中・橋本）はこれまで、浜田市弥栄自治区の社会課題でもある中山間地域の担い手不在問題について、ボランティア・大学生の可能性を考察するとともに（藤本・田中・平石, 2010、橋本・藤本, 2011）、人的支援をつうじた中山間地域支援・再生の可能性について検討してきた（藤本, 2010a、2010b、2010c）。本稿もこれらに続く続編として書かれたものであり、認識・視点を共有するものである。

本稿で検討するフレッシュマンセミナーのフィールド編開催にあたっては、「地域を学びの場にしたい」という大学教育側の想いと、「地域の現状を知ってほしい、もっと若者と触れ合いたい、議論したい」という地域住民側の想いが一致している事を、コーディネーター役となった筆者（藤本・田中・橋本）が感じており、この２つの想い・意図をどのようにして具体的に結びつけ、双方にとって満足のいく形での実現に、いかにして至るかが課題であった。両者を結び付けることで想定した成果としては、参加した学生が、自らが学生生活を送る地域の課題に気づき、関心を持ち、自分なりのやり方で関わるようになること、さらには参加学生への教育効果のみならず、中山間地域が元気な若者で「賑わう」ことも期待された。大学に地域との「つなぎ役」を配置する事で、学生への教育効果と中山間地域の交流人口増加を同時に実現する仕組みの開発を構想したのであった。

以下ではまず、社会実験としての地域コーディネーター配置の概要を示し（第１節）、地域コーディネーターが拓いた新しい大学と地域との関係性（これを「新しい共同性」とよんでみたい）について、フレッシュマンセミナーのフィールド編を事例に記述し、考察する（第２節）。その上で、大学と地域との協働事業を構築する際の課題を、調整過程を分析する事で明らかにし（第３節）、課題を乗り越える方法論と仕組みを提示する（第４節）。

１．地域コーディネーターの配置

(1)地域コーディネーター配置の背景

過疎・高齢化の進む中山間地域を支援するために、地域再生支援、集落支援を職務とする人材（＝地域再生支援員）[1]の配置の必要が指摘され、各地への配置が現実に進んでいる（笠松, 2009、小田切, 2010、藤本, 2010c）。

地域再生支援員の重要な役割は「つなぎ役」である。「つなぎ役」とは具体的にどのような役割なのか。手がかりを掴むために、筆者（藤本・田中・橋本）は、「匹見町まちづくりコーディネーター」の石橋留美子氏（益田市匹見町）と浜田市弥栄町で「地域マネージャー」として活躍する皆田潔氏の活動に注目し、ヒアリングや参与観察等をつうじて理解を深め、議論を重ねている。

例えば石橋氏は、ボランティア作業要請の受付やボランティア会員への告知、募集をはじめ、作業当日までのボランティア会員と地元との調整等、ひきみボランティア制度を動かす仕事すべてを請け負っていた 。地域でのボランティア活動には、地域に必要とされている、少し支えて欲しいボランティアのニーズを発掘し、勇気づけ、事業化する人物が必要である。他方で、地域外の方々に広く呼びかけ、募集し、人を集め、投入する、というすべてを仕切る必要があり、さらにはボランティア制度を継続的に運営していくために、ボランティアの人員確保／開拓も重要な課題となる事が、石橋氏の仕事からわかった[2]。

皆田氏は、小規模・高齢化の進む集落を特に気にかけながら、普段の付き合いのなかでは接点のない人と人をつなぐことで住民を勇気づける動きをしている。地域内外の様々な人物をつないで組織した「弥栄らぼ」と、作業支援を主な活動内容とする島根県立大学の学生サークル「里山レンジャーズ」を率い、弥栄町内を縦横無尽に動き、多面的な関係性を構築していった[3]。

大学と地域との連携構築を模索していた筆者（藤本・田中）は、大学と地域との間にも

「つなぎ役」となる人材の配置を検討し、社会実験として、「島根県立大学JST人材育成グループ地域コーディネーター」を配置する具体的な着想を得ることとなった（2009年４～８月）。石橋氏や皆田氏からの調査で得られた知見は、「地域における新しい関係性の構築は、地域外の人材が地域のために汗を流すなかで生まれる」という点である（藤本, 2010c）。したがって、地域コーディネーターには、地域外人材を配置することとした。

(2)地域コーディネーターの職務形態

地域コーディネーターを配置するための具体的な予算措置としては、社会実験としての要素も踏まえ、郷づくり事業の一環として行なうこととなった（2009年８月）。

地域コーディネーターの所属を島根県立大学職員（常勤・嘱託職員）[4]とし、選考にあたっては、農村や地域に入り、コミュニティ開発に従事した経験がある人物を求めた。職務遂行にあたっては、活動地域（浜田市弥栄町）に居住し、仕事場である島根県立大学に通うことを条件とした。地域に住み、地域での日々の活動に参加しながら地域を知る／地域住民に知ってもらう事が最初のステップとなると考えたためである。そして、2009年９月に、初代地域コーディネーターとして平石純一氏が着任した。二代目の橋本文子も同様のスタイルを取り、現在（2010年12月現在）まで、２名、通算15カ月にわたって、地域コーディネーター配置の社会実験を継続中である。

(3)どのような人物が、地域コーディネーターとして働いているか――共通点を求めて

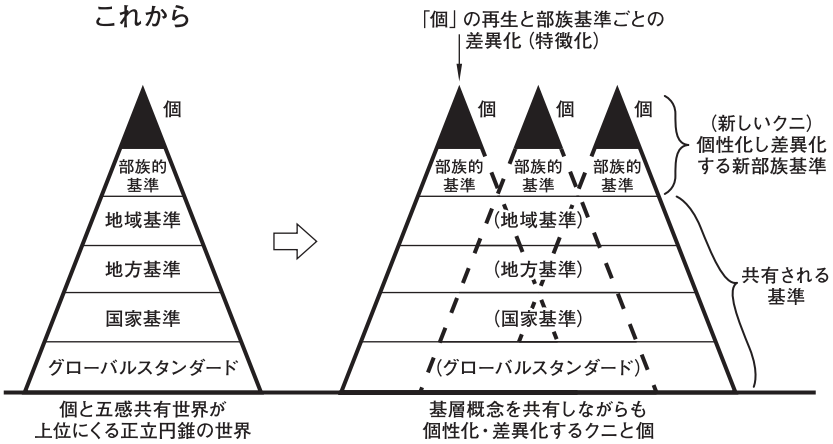
次に具体的にどのような人物が働いているのか考えてみたい。地域コーディネーターは、2009年９月から2010年３月までを平石純一氏が、2010年４月より現在までを筆者（橋本）が務めている。初代コーディネーターである平石純一氏は、学生時代、筆者（藤本）が企画を担当していたNGOのスタディツアーに参加し、その後、青年海外協力隊員としてウガンダのチカジョという村で学校に行けない／行っていない子どもや女性たちと、アクセサリー作りやミシンによる装飾をつうじた商品開発や販売を行ってきた[5]。二代目コーディネーターである筆者（橋本）もまた、大学院生時代にNGOでインターンを行なう等、国際的な舞台でのコミュニティ開発に携わった経験を有している。

地域コーディネーター配置の社会実験を着想し、マネジメントしている筆者（藤本）も、NGOスタッフとしての職歴を持ち、「国際感覚（＝グローバルスタンダード）」を基盤に、地域やコミュニティ、さらには自身のキャリアを捉えていることが三者の共通点として見えてくる。

NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部を主宰し、人的支援による中山間地域再生に先駆的に取り組んできた関原剛氏は、「グローバルスタンダードを基礎概念として共有し、国家基準、地方基準、地域基準、部族的基準、個の基準と水準が上昇するごとに、個性化し、差異化（特徴化）していく「正立円錐」の世界把握が必要ではないか」（関原, 2008: 267頁-270頁）と指摘する。（**図１**参照）

このように考えてみると、国際でのコミュニティ開発に取り組み、グローバルスタンダードを内面化した人物が、内国の中山間地域という個性的かつ特徴的な場面にキャリアをつなぎ、活動を展開している社会移動として捉えられると考えられる。この点については、今後さらにケースを収集し、検討を深めていきたい。次節では、地域コーディネーターが

図１　「正立円錐」の図



出典：関原, 2008: 269頁

築いた新たな大学と地域との関係性について、「フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク」を事例に検討しよう。

２．地域コーディネーターが拓いた「新しい共同性」
――フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワークを事例に

(1)フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワークの全体構想

地域と大学の関わり方については多様なあり方が考えられるが、郷づくり事業は「地域と大学にとって双方がより望ましい関係の持ち方」を模索できる機会であると言えよう。

郷づくり事業人材育成グループのプロジェクトの一部は、島根県立大学大学院および学部において幾つかの既存講義科目と連携を図って実施されている。そのひとつとしてフレッシュマンセミナーにおける弥栄フィールドワークの取り組みが挙げられる。島根県立大学では初年度教育としてフレッシュマンセミナーを開講しており、１年生全員を対象とした演習科目として設置されている。

郷づくり事業人材育成グループでは、当科目と連携することにより（2009年10月より継続実施中：藤本・田中・平石, 2010: 75頁-78頁）、１年生を対象とした早い段階において、環境共生や農的生活、環境問題、集落支援活動への興味関心を喚起できる。また将来の新たな担い手発掘としても継続的かつ総合的な取り組みが期待できる。

一方、大学教育の視点からの連携意義としては、学生がフィールド学習に参加することにより、地域問題と自らの修業の関連付けがより具体的になり、同時に学生が自ら問題を発見する契機を得られる。また学生自身がフィールド学習を経験するなかで、いかにして社会問題や地域課題と、自分自身の問題意識との関わりを築いていくのかを考える機会を得られるであろう。

以上の点で郷づくり事業とフレッシュマンセミナーにおける連携プログラムは、地域と大学教育にとってのより望ましい関係の持ち方を模索する機会であり、今後の大学の地域貢献やカリキュラムの方向性を検討する上で多くの示唆が得られると予想される。

1)テーマ別グループ学習

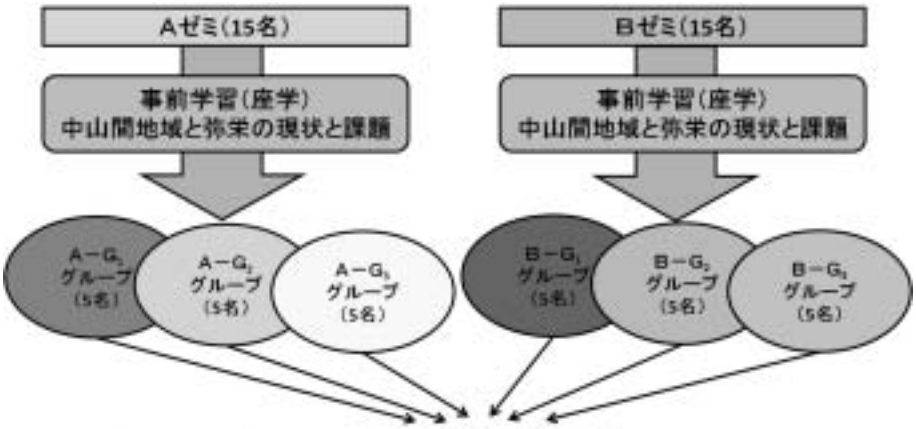
2010年度春学期のフレッシュマンセミナーでは、金野和弘先生、西藤真一先生の２つのゼミ（29名）との連携が実現し、ゼミごとのフィールド学習ではなく、グループ編成したチームによるフィールド参加体制を提案した。2010年度は運営体制を改善したことで、一度限りのフィールド参加とそのレポート作成に終わるのではなく、継続的かつより地域に切実な問題を題材にしたテーマに取り組めた。

初めに人材育成グループ地域コーディネーター（橋本）が、フィールド学習内容を参加ゼミへ複数提案し、そのなかから学生グループが興味関心のあるフィールド学習内容を選択して参加するという形態をとった。フィールド学習にあたり、弥栄に関する基本情報習得のため事前基礎講義に参加してもらい、その後に各グループが実際にフィールド学習に臨んだ。フィールド学習ごとに課題を提示し、参加後、各ゼミ担当教員の指導のもと、グループごとに報告資料を作成し、最終的に地域住民を交えたゼミ合同報告会で発表を開催

表１　テーマ別グループ学習の流れ

①フィールド学習項目の提供	全回とも農的・環境共生的な取り組みに関する学習内容を提供
②基礎座学の実施	中山間地域・弥栄の現状と課題を知る 島根県立大学公開講座「島根で暮らす、環境共生という生き方」、2010年５月14日第１回『「島根で暮らす、環境共生という生き方」への招待』、藤本穣彦
③フィールド学習の実施	各グループがフィールド学習内容と関心に合わせて参加
④報告資料作成(毎週の演習)	問題意識の育成・情報収集・グループ作業等のコミュニケーション・スキルの育成
⑤合同報告会開催	学期末にゼミ合同グループ報告会を実施

図２　フィールドワーク運営体制



	日 程	フィールド学習内容	参加グループ	
春学期メニュー	５月４日	ふるさと体験村春祭り	A－G_1	B－G_2
	６月12日	弥畝山から考える、弥栄のこれまでとこれから	A－G_3	B－G_1
	７月３日	農業組合法人ビゴル門田	A－G_2	B－G_3
	７月22日	合同報告会	２ゼミの６グループ	

するに至った。(**表１・図２**参照)

2)弥栄フィールドワーク学習内容

実習の内容に関しては、各フィールド学習内容に合わせた課題を人材育成グループ側で準備し、参加グループの学生が課題に沿って現場で聞き取りを実施した。

第１回のふるさと体験村春祭りでは、①弥栄で生活する楽しみや醍醐味と、逆に困っていること、課題等について聞いてもらい、自治体や住民の方々が取り組まれている対策や取り組みについて調べてもらった。

第２回は島根県立大学公開講座との連携で実施され、島根県中山間地域研究センター特別研究員・福島万紀氏による「弥畝山から考える、弥栄のこれまでとこれから」という弥栄町現地でのイベントに参加しながらの聞き取りとなった。聞き取りのテーマとして中山間地域での森林と共に築いてきた暮らし方について考えてもらった。①弥栄の山は自然環境面と生活面においてそれぞれどのように変化したのか、②この変化から生じる問題はどのようなものがあるのか、③対策や取り組み、について聞き取りをしてもった。

第３回は、弥栄町門田集落での地域活性化の取り組みをテーマに、「農業組合法人ビゴル門田」を訪問した。過疎化や高齢化の問題を考えるために、①門田集落についての概要(世帯数、年齢層、農作物等)、②農業の現状（作業人数、作業体制、農業組合法人、法人化した理由、具体的な取り組み内容等)、③産品開発と流通（商品種類、販売先、売れ行き、価格、将来の商品構想等)、④地域（集落）活性化の取り組み、についてお話を伺った。

聞き取り作業を終えたグループから、毎週のゼミ演習において、担当教員の指導のもと課題をまとめ、そこからの発見事実を踏まえながら、関連文献や資料を収集し要約しながら、発表資料の作成に向かった。

(2)弥栄フィールドワーク実践のケーススタディ

以下、本項では、2010年度春学期に開催した弥栄フィールドワークを詳細に検討していこう。とり上げる事例は、次の４点より考察され、記述される。①フィールドワークの目的、②フィールドワークの内容、③学生の感想、④振り返ってみてフィールドワークの何がポイントとなったのか。

1)ふるさと体験村春祭り（2010年５月４日・祝）

① 2010年５月４日、ふるさと体験村春祭りが開催された。この春祭りは、弥栄町の集落による出店をはじめ、地元野菜やどぶろくの販売、ヤマメのつかみ取り、安城社中による石見神楽等様々な催しが行われ、例年、浜田市内外から多くの来場者で賑う祭りである。

2010年４月中頃、筆者（藤本、橋本）はこの春祭りに島根県立大生も参加できないだろうかと考え、弥栄支所産業課の新開智子氏に相談した。新開氏は「大学生が祭りを手伝ってくれたら、地域の人も喜んでくれるだろう」と仰ってくださり、ふるさと体験村の長田英雄局長に話をつないでくださった。長田氏も、「春祭りは来場者が多く出店側も忙しいので、若い人が手伝ってくれると非常に助かる」と学生の参

表２　ふるさと体験村春祭りにおけるフィールドワークの概要

一日の流れ	8:20 （県大生）県立大学バスロータリー前集合 8:30 大学出発 9:10 ふるさと体験村到着 -ふるさと体験村 長田英雄局長に挨拶 -本日の説明 春祭り参加 聞き取り（集落の方にレポート課題に関する質問をして聞き取り調査実施） 12:45 作業補助終了 自由行動 15:00頃 体験村を出発、大学へ戻る
場所	ふるさと体験村
案内人	ふるさと体験村春祭りスタッフ、浜田市弥栄支所職員の方々
参加者	島根県立大生 4名

加を快諾してくださった。筆者（藤本、橋本）からは、「ただ祭りを手伝うだけではなく、祭りへの参加をとおして地域の人と交流してもらおう」という提案があり、一方筆者（田中）からは、ゼミの学習であるためイベントの単純な手伝いに終わってしまうことが危惧された。これらの経緯から、人材育成グループでは祭りの手伝いと聞き取りを組み合わせたフィールドワークを企画するに至った。（**表２**参照）
ただ、ゼミの学習の一環で参加するため、丸一日手伝いとして参加するのは時間的に長すぎる、と筆者（田中）から指摘があったため、長田氏には午前中のみの手伝いで了承していただき、半日のフィールドワークとした。

② 当日８時30分、大学生４名はバスに乗って県立大学を出発、９時過ぎにふるさと体験村に到着した。大学生等は、筆者（藤本、橋本）と一緒に長田局長に挨拶した後、さっそく出店販売の手伝いに入ってもらった。２名はヤマメの塩焼き売りのお店へ、２名はどぶろく、牛丼、しし汁売りのお店に入ってもらった。それぞれのお店に学生の紹介をすると、「手伝ってくれてありがとう。よろしくお願いします」と歓迎してくださり、「手伝いもだけど、何よりも祭りを楽しんでいってね」と声をかけられた。４名は、初めは何をすればよいのかわからない様子であったが、地域の人に「何かできることはありますか」と、自ら積極的にコミュニケーションを図り、少し

（学生による出店のお手伝いの様子）

ずつ店の一員として参加していった。

販売を手伝いながら、４名は地元の方々に弥栄町での生活についてインタビューをしていった。初めは学生だけではうまく聞くことができないため、筆者（藤本）が司会としてインタビューを行ない、学生はメモを取りながらわからないことやもっと知りたいと思ったことを質問する、ということから始めていった。祭りの雰囲気や地域住民と話すのに慣れたのだろうか、１、２時間もすると、学生たちと地元の方々の間で談笑する様子を見ることもできた。

当初出店での手伝いは午前中までだったので、学生たちは再びバスに乗って県立大学へ帰る予定であったが、学生から「もう少し残りたい」、「祭りを楽しんで帰ってもいいですか」という要望があり、滞在時間をのばすことにした。大学のバスは時間を延長することができないため、バスは空で帰ることになり、帰りの交通手段は、市内に住む郷づくり事務所スタッフ等にお願いして車で送ってもらうことにした。こうして、学生たちは午後も残り、聞き取りを続けたり、他のお店をまわってみたり、神楽を見たりして祭りを楽しみ、思い思いの時間を過ごした。この様子は、山陰中央新報（2010年５月４日）にもとり上げられている。

中山間地の現状体験
県立大
浜田・弥栄で実地調査

浜田市弥栄町の住民に話を聞く県立大生

県立大の看護学部と中山間地域研究センターの特別研究員らでつくる県立大チーム（浜田市弥栄町）が、中山間地の現状を知ってもらおうと同市弥栄町でフィールドワークを実施。学生が町の魅力などを学んでいる。

同グループは、学生だけでなく、中山間地域に暮らす住民の思いや地域活性化に向けた取り組みなどを理解してもらおうと、祭りの手伝いや弥栄山の散策などのフィールドワークを企画した。

第１回のフィールドワークは大型連休中の４日、同町であった「ふるさと体験村弥栄まつり」の会場であり、いずれも同大１年の牧谷琢文さん（18）、二宮春貴さん（18）が参加。２人はヤマメの塩焼きの販売を手伝うとともに、祭りに訪れた地元住民に弥栄の生活や同町に残る古民家について聞き、熱心にメモを取った。

フィールドワークは春、秋の四季に３回ずつ行い、学期終了後に報告会を開く。同大では初めての試みで、同大で看護学部全体でのフィールドワークを企画した。

第１回のフィールドワークは大型連休中の４日、同町であった「ふるさと体験村弥栄まつり」の会場であり、いずれも同大１年の牧谷琢文さん（18）、二宮春貴さん（18）が参加。２人はヤマメの塩焼きの販売を手伝うとともに、祭りに訪れた地元住民に弥栄の生活や同町に残る古民家について聞き、熱心にメモを取った。

フィールドワークは春、秋の四季に３回ずつ行い、学期終了後に報告会を開く。同大では初めての試みで、同大で看護学部全体でのフィールドワークを企画した。

掲載記事　山陰中央新報（2010年５月４日）

③ 参加した学生からは、「祭りの屋台と言えば利益重視の的屋という印象だったが、春祭りの屋台のほとんどは、利益もそこそこに、楽しむこと、集落や仲間みんなでやることを大事にしていて、人と人とのつながりや、弥栄地域の活性化を大事にしていると感じた」、「弥栄のお年寄りはみんな元気がよく、声も大きくてびっくりした。弥栄で採れた山菜もいただいたがとてもおいしかった。地元で採れた旬のものを旬な時に食べているから、みんな元気なんだなぁと思った」との感想をもったようで、「授業で習う、メディアで報道される、過疎・高齢化の進んだ寂しいイメージと違う」、「活気のある、弥栄の祭りの勢いを感じた」と認識を改めていた。

④ 今回のフィールドワークでは、ただ単に祭りに参加するだけでなく、地域の方々と一緒に、お店を切り盛りすることによって、地域の方々の祭りに対する姿勢や地域

への想いを感じとることができたのではないだろうか。ただ参加する、ただ話を聞きに行くだけでなく、「共に汗を流す」ことが重要であると考えられる。

2)弥畝山散策（2010年６月12日・土）

① 第２回のフィールドワークでは、「弥畝山から考える、弥栄の暮らしぶりの変容」をテーマに、コーディネーターの福島万紀氏、弥栄町山使いの達人である徳田金美氏、佐々本道夫氏、三浦香氏の３名と共に弥畝山に向かい、弥栄の山を案内していただいた。（**表３**参照）

表３　弥畝山散策フィールドワークの概要

一日の流れ	12:20 （県大生）県大バスロータリー前集合 12:50 大学出発 13:00 弥畝山へ出発 13:35 牧場跡地へ到着 13:50 ブナ林散策道入り口の手前に到着 →ブナ林散策道の入り口まで、湿原を見ながら舗装道を散策 14:45 ふるさと体験村到着 →ふるさと体験村の炭窯見学、ナラ枯れ病の説明 15:30 解散、大学へ戻る
場所	弥畝山、ふるさと体験村
案内人	徳田金美氏（ふるさと体験村・ふるさと案内人） 佐々本道夫氏（島根県認定林家） 三浦香氏（弥栄町公社造林監視員）
参加者	島根県立大生　13名

② 弥畝山は標高約900メートル。標高が高いため浜田市内に比べると気温も低い。雪が多いところで、1.5～2.5メートル積雪する。ブナ科の落葉広葉樹が、秋に紅葉し、落葉し、たい積される。そのたい積されたものがスポンジの役割を果たし、水分を蓄え、きれいな水を徐々に下流に流してくれる。そのことによって川のなかに藻ができ、それをアユが食べ、アユを人間が食べる。そういう循環ができているそうだ。「水源の森は人間の生活に大変役に立つ」と三浦氏は語った。

徳田氏は、昔の山の様子を次のように語る。「明治初期までは、牛をそのまま山のなかに放牧していたので、この湿原にまで水を飲みに来ていた。また牛にあげるための草地をつくるための山焼きを弥畝山全体で行われていた」、と。学生たちは、徳田氏の話を聞きながら、昔の弥畝山の風景を想像していた様子であった。

また、佐々本氏からはナラ枯れ病という問題について教わった。ナラ枯れ病とは、カシノナガキクイムシという虫が木のなかに侵入し、ナラ菌というカビを持ち込んでナラの木のなかで繁殖させ、それを餌にして木のなかで成虫になり、木が枯れてしまう病気である。

佐々本氏は「私は今シイタケ栽培もしているが、シイタケ栽培にもナラ枯れは影響している。シイタケ栽培に最も適したナラの木がやられるということは私たちにとっ

ても大変困った問題である。かといって放っておくわけにもいかんし、利用できるものは利用して、そこにはまた新しくクヌギの植林をしたり、このままで置いたんではだんだん暗くなるいっぽう。なんとか対策をせにゃいかんと思っている」、「ここに生まれた以上、木によって我々が暮らしてきた、その恩返しとしてはやっぱり何かの対策を考えて、木が育つようにしていかないと、それが私らの義務だと思っている。このままあきらめてはいけない」と言う。「弥栄の人々の山に対する想い、次世代のためにも山を守っていきたいという強い意志を感じた」と、参加した学生は話していた。

（三浦氏の説明を聞く学生）

（薪割り機を実演する様子）

③ 今回参加した学生は、「私が住んでいる出雲市とはまったく違った風景が見れて、とても新鮮だった」、「恵まれた自然・生き生きとした地域の人々の笑顔と日本の元来の風景というものがこれであり、後世にも残していかなければならないと思った」等、普段暮らしている場所とは違う風景に出合ったことで、山村について新たな発見をしたようだった。今回の企画は、地域住民の「自分たちの暮らしている地域の現実、現状を若い人にも知ってもらいたい」、「自分たちが生きてきた土地や自然のことを次の世代に伝えたい」という３氏の想いに基づいたものであった。

④ 弥畝山に詳しい地元の案内人と一緒に山を歩くことで、昔の山の様子や山が果たす機能等、単に散策しただけではわからない、地域に伝わる知恵を教わることができた。「自分一人ではとても来ることが出来ない場所だと感じていたので、このような機会で歩けて、色んな新しい発見がありました」とある学生は話していた。

3)「農事組合法人ビゴル門田」訪問（2010年７月３日・土）

① 第３回は、「過疎化や高齢化の問題を、特に農業の視点から考える」をテーマに、弥栄町門田集落にある「農業組合法人ビゴル門田」の牛尾英昭氏に門田集落、農業の現状、農業組合法人についてのお話を伺った。

当初計画では、小坂農業生産組合の話を伺おうと考えていた。しかし、フィールドワーク実施日に小坂集落内で集落行事が入ってしまったため、直前になってから急きょ、計画変更を余儀なくされてしまう。そこで日頃から筆者（藤本、橋本）が暮らす門田集落の牛尾氏にお願いする運びとなった。企画変更することでフィールドワーク中止は免れたが、そのことで大学側の先生に説明しなおす負担をかけてしまっ

表４　「農事組合法人ビゴル門田」でのフィールドワークの概要

一日の流れ	12:20 （県大生）県大バスロータリー前集合 12:30 大学出発 13:00 弥栄門田集落 到着 「農事組合法人ビゴル門田」視察 聞き取り（事前課題に対する質疑応答） 15:30 終了、希望者はふるさと体験村へ移動 （ふるさと体験村にて）自由行動 17:30 県大到着、解散
場所	門田交流センター
案内人	牛尾英昭氏（農事組合法人ビゴル門田）
参加者	島根県立大生 13名

たことは、反省点である。門田集落でのフィールドワークは2009年度に続き２回目の開催となった（藤本・田中・平石, 2010: 77頁-78頁）。（**表４**参照）

② 門田集落は2010年12月現在、29世帯、人口51名の地域である。現在、集落の住民全員が加入する「農業組合法人ビゴル門田（以下、ビゴル門田）」を立ち上げ、米、そば、大豆を栽培している。

弥栄の農業の現状として、担い手不在問題、耕作放棄地問題があると牛尾氏は話す。「米の金額を自分たちで決められない」ため、いくらお米を作っても、年々米の値段が下がっていくため儲けが出ず、農業で食べていこうという人が減っているそうだ。農業を継いでくれる若い人がいないため、高齢化に伴い農業を続けられない農家が現れ、管理を放棄された「耕作放棄地」が増加していると言う。

集落の高齢化に伴い、オペレーター個人に対する耕作依頼が増加し、草刈り等を含めた管理作業が個人だけでは対応できないものになっていた。牛尾氏は、それならば「みんなで一緒にやったろう」と法人化を決心したそうだ。

門田集落の住民のうち半数が高齢者であり、「ビゴル門田」の作業は「４、５人でやっているのが現状」だと言う。特に、助成金申請や賃金計算等、事務仕事のほとんどは牛尾氏が請け負っているそうだ。「事務量が多く、他にできる人がいないため、自分がやるしかない」と牛尾氏は話す。やはり「後継者不在」という問題が門田集落

（聞き取りの様子）

（牛尾氏に質問する学生）

でも起こっている。

反対に、弥栄で暮らす楽しさについて、牛尾氏に聞いてみた。牛尾氏自身は弥栄の出身であり、「長男坊だから」とこれまで弥栄を離れたことはないと言う。高校を卒業し、弥栄村役場に就職した。退職後は、「ビゴル門田」の一員として農作業をしているが、「退職した後のほうが、毎日違う仕事がある。自然を相手にのんびりすることができる。」と現在の暮らしを楽しんでいらっしゃった。

また、門田集落の活性化、後継者不在問題の取り組みとして、「門田で話創哉（はなそうや)」による交流を紹介していただいた。これは、現在は門田の外に出てしまった門田集落出身の方々を招き、現在門田に住んでいる人も、門田を離れた人も、一緒になってふるさとについて語ってもらおうという会で、毎年11月に開催されており、今年（2010年）で３回目を迎える。石見神楽の上演や集落の女性陣による郷土料理がふるまわれ、とても楽しい一日になると言う。「私も行ってみたい」という学生からの声も何名かから聞こえた。

（第３回「門田で話創哉」2010年11月21日開催）

（石見神楽上演）

15時半頃、牛尾氏への聞き取りは終了した。当初は、このまま県立大学へ戻る予定であったが、学生から「話を聞いていたら、お米を食べたくなった」と声があがる。「ふるさと体験村に行きたい」という要望があり、急きょ希望者を連れてふるさと体験村へ向かうこととなった。学生たちは、食堂で親子丼を食べたり、説明を受けた「クマ笹茶」が実際に店頭で売られている様子を見たりした。「お米がおいしい！」と笑顔で親子丼を食べる学生の姿が印象的であった。

③ 参加学生からは、「自然が豊かで、農業をするには適した場所だと思った。ぜひもう一度行ってみたい」、「小さな集落でも、法人を設立することによって、様々な補助金や減免の申請ができることを初めて知った。こういう生き残り戦略もあるんだとわかった」、「私は島根県出身で、身近に米の生産をしている者がいるが、実際に生産者の方の話を聞くことがこれまでなかったので、今回の話はとても貴重な経験になった」との声が聞かれた。今回も、新しい発見が多くあったことが伺える。

④ 今回参加した学生に聞いてみると、その半数以上が実家からお米を送ってもらっていた。しかし、実際にお米を作っている様子を見たことがあるのは数名で、今回牛尾氏の話を聞いて初めて農業生産の現状を知ったようだ。

話し手の牛尾氏も、２回目だったこともあり、より学生に伝わりやすい話をしてい

ただくことができた。今回の経験から、同じ場所で続けてやることも重要であるという気づきを得た。2011年度も継続して門田集落でのフィールドワークを計画していきたい。

4)合同報告会（2010年７月22日・木）

以上３回のフィールド学習を終え、各グループが聞き取りの情報と自ら現地へ出向いて得られた知見等を踏まえ、その成果を２ゼミ合同報告会にて発表してもらった。

合同報告会では、担当教員の他に、コメンテーターとして地元弥栄町の方や、総評を頂くため人材育成グループグループリーダーである藤原眞砂教授にも参加いただいた。学内・学外からの評価者を招いたことで、学生の学習成果に対し、多様な視点のフィードバックが得られるという意味で、学習効果が期待できる報告会となった。(**表５**参照)

表５　合同報告会概要

日　　時	2010年７月22日（木）４限（15：00～16：30）
場　　所	島根県立大学　大講義室１
コメンテーター	岡田　　浄 氏（浜田市弥栄支所自治振興課・やさか郷づくり事務所） 福島 万紀 氏（島根県中山間地域研究センター） 藤原 眞砂 氏（島根県立大学教授　人材育成グループリーダー）
発　　表	５グループ（金野ゼミ２グループ＋西藤ゼミ３グループ）
報告タイトル	「弥栄村について考える～弥栄村のこれからのために～」（西藤ゼミ） 「弥栄の森とともに生きる」（金野ゼミ） 「弥栄町 弥畝山散策」（西藤ゼミ） 「弥栄村を訪ねて」（金野ゼミ） 「弥栄・門田集落での地域活性化の取り組み」（西藤ゼミ）

各グループはパワーポイント形式にて、代表者が発表を行なった。

ふるさと体験村春祭りに参加した１グループからは「弥栄村について考える～弥栄村のこれからのために～」と題し、弥栄での高齢化・人口減少の問題についての基本データをまとめ、そのために行なわれてきた対策としてIUターン者確保のための定住化対策についてデータを基にその効果を検討した。さらに弥栄村の今後のために大前提の課題として地域を「好き」になることがキーであると提言して締めくくられた。

弥畝山散策に参加した２チームからは「弥栄の森とともに生きる」と「弥栄町 弥畝山散策」のタイトルで、弥栄・弥畝山の概要、中山間地域の抱える問題、弥畝山の課題、ナラ枯れ病について、弥栄の人々の取り組みについて発表された。県や各省ホームページの統計データを網羅し、人口減少の原因や少子高齢化についての現状と関連させて、弥畝山の変化や抱える問題について説明がされた。また西日本最大級の湿原であることや希少な植物が生息していること等も、学生自ら撮影した写真と共に紹介され、森林が人の生活に不可欠な機能を果たしていることが報告された。感想として「地元愛が強い」や「予想以上に人が少ない」、「弥栄や弥畝山の歴史についてもっと知りたいと思いました」、「とても空気が美味しかったです。また行きたいと思います」等が述べられた。

「ビゴル門田」へ訪れた２グループからは「弥栄村を訪ねて」、「弥栄・門田集落での地

域活性化の取り組み」のテーマで、弥栄・門田集落の概説の後、農作物、法人化の利点と課題、今後の取り組み、これからの門田について、の報告が行なわれ、門田集落での地域や農業への取り組みに関する発表がなされた。

以上の５グループからの発表を受け、コメンテーターの岡田氏、福島氏からは、現在の課題について当事者側からの視点でコメントをいただいた。また実際に弥栄町へ足を運んでみた印象について質問する場面もみられ、自分たちの地域の今後を真剣に考える意義や取り組み姿勢について語られた。

３．大学と地域の連携を構築する際の調整課題

(1)大学側の調整過程

1)具体的な企画調整段階での課題

初めに郷づくり事業との連携で講義を受け入れてくださる先生を探すことから始まった。フィールド学習として弥栄町を対象にすることにご理解頂くために、郷づくり事業の概要を説明しに伺った。その上で弥栄をフィールドとして学ぶ意義や効果についてお話し、参加してくださるフレッシュマンセミナー担当教員に協力をお願いした。

続いて参加教員のニーズを満たすメニューの提案を行なった。参加教員の教育方針や目的を満たすよう、要望を伺いそれをもとに、地域コーディネーターが地元での人脈をつうじて、受け入れ可能な集落やイベントのなかから提供できるフィールド学習項目を考案した。しかし今回は調整が遅れたことから、教員のニーズを聞き取ることが十分にできず、人材育成グループ側の判断で提案したものをほぼ受け入れてもらったという課題も残った。

日程調整についても、地域へ依頼する関係上、先方の都合を優先することになる。加えて実施時間も、往復の移動時間、お話を頂く方の話の長さ、聞き取りと質疑応答等を考慮すると、90分の１講義内では収まらず、学生教員ともに他の講義がある平日にフィールド学習を実施することは、仕事を持つ地域の方にとっても難しいこととなる。よって全３回の開催は全て土日祝の休日実施となった。

参加ゼミとフィールド学習内容・日程が確定した後は、各回のフィールド内容と日時の詳細決定、聞き取り課題の資料を作成し、ゼミ担当教員をつうじて学生へ配布し周知してもらった。

一方、ゼミ担当の先生方には、学生のグループ分け、フィールド学習内容の参加者を確定してもらう作業と、聞き取り後には各グループの報告資料作成のための個別指導をお願いした。

また、地域コーディネーター（橋本）からは、地域のことはもちろんのこと、参加するイベントや集落についての基本情報の把握のため、ゼミ担当教員とゼミ学生に対し、あらかじめ集落のパンフレットやイベントのチラシ、過去の取り組み記事等が配布された。

続いて、移動手段の確保が必要となるが、地元の協力の上に成立している学習のため、地域の方の日程をある程度優先する必要もあり、移動手段となる大学公用車が別の校外学習と重なり確保できないという問題があった。今回の場合、地域コーディネーターが地元の人脈を頼りに、ふるさと体験村のバスと運転技師に交渉し、結局３回中２回はこの移動手段で実施する結果となった。

フィールド学習を終えた後は、合同報告会へ向けてゼミ担当教員と報告会の打ち合わせ

協議を実施し、発表の前週には合同報告会リハーサルを開催することを計画し実施に至った。

以上から、大学側の企画調整段階で重要になる事項としては、その地域を学びの場とするフィールド学習への理解、綿密な事前協議（教員のニーズを満たす学習内容のため、日程確保のため、教員・コーディネーター間および教員・学生間の連絡調整のため）、地域の基本情報の提供、日程調整の難しさ、移動手段の確保、以上のことが挙げられる。

2)大学と地域の関わり方の根本的な課題

以上みてきたように、フィールド学習を実行するにあたっての大学と地域の関わりから、幾つかの根本的な課題が生じていることがわかった。このことを考慮する必要から、担当教員側のニーズ把握をベースに、可能な限り地域の要望とマッチングさせることに努めた。

これまで大学と地域の関わりから出た課題のひとつとして、学内側と地域の要望に相違が存在し、この相違が原因となり地域での教育活動や実践教育を扱いにくいという問題が生じていたからである。

課題として具体的に挙げられるのは、大学と地域の目的の相違、事前事後の地域側との段取り調整とその後のフォローの問題、継続性の問題が挙げられる。

第一の課題として大学と地域の要望が異なる点が挙げられる。今回のように地域へ出向くフィールド学習は、大学教育の側面からは学生が現場で問題を知覚し、対策を検討し、社会人としてのコミュニケーション能力の育成等、その他一連の学習効果が期待できる。しかし、地域側のメリットとしては、学生の受け入れから地域活性化につながる発想や具体策の提案を期待できるが、高齢化した人々が日常業務に追われる最中で学生の受け入れ準備等をする必要があり、この負担を考慮すると、若者との交流という賑わい効果程度しか残らないという課題もある。賑わい効果においても継続的な関わりを希望する地域側に対し、大学講義科目内における時間制限や移動手段等の問題から継続的な関わりが難しい事情があり、双方の要望に根本的な相違が生じている。

第二の課題として、学生を地域へ送り込むための事前・事後の段取りやアフターフォローが必要になるが、フィールド学習の機会を持つことを希望しても、地域への接近・交渉、移動手段の確保、参加準備、行程作成、地域担当者への依頼等々の段取りと、実施後のアフターフォロー（継続対応、発表会・報告書等の現地へのフィードバック等）、これからの関わり方等、全てを担当教員が負担することになる。これらの負担から、実現が難しくなっている事実も否めない。

第三に大学と地域との関わりの継続性についてであるが、地域側からは一度きりの交流ではなく、継続的に地域へのイベントや行事に参加してもらいたいという要望が少なくない。同じ学生と継続交流することが望まれるケースも多く、この場合、大学としては講義時間内での実習であること、学年が変わるので特定の個人が継続参加することは、講義枠では非常に難しい状況であること等の問題が挙げられる。一つの講義のうち数回のフィールド学習という形で組み込む場合には、地域との綿密な事前協議の上実施する必要があり、フィールド学習の計画において重要かつ注意が必要な問題である。

(2)地域側の調整過程

他方、地域側との調整過程を検討してみよう。まず、筆者（藤本・橋本）は、現地との調整をする前に、フィールドワークの時間にどんなことを学びたいかを先生方と確認した。教員が学生たちに地域のどのような問題を理解してほしいのかを知り、地域のどの人に頼めばいいかを見定め、受け入れてくださるようお願いするためである。どの人に頼めばいいのかについては、その地域のことをよく知っていなければわからないし、またその人と密な関係を築いていなければ断られてしまうことも多い。受け入れていただく地域の方にどのようなことを話してほしいかを丁寧に説明する必要もある。受け入れてくださる方との、十分かつ丁寧なやりとりが重要である。フィールドワーク実施の依頼、開催までの打ち合わせ（場所・時間・内容）、終わった後のフォロー等、受け入れてくださる方のところへ何度も足を運び、話をする。これは、地域（弥栄）に暮らしていてこそ十分な対応が可能となることであった。

(3)課題を乗り越えるための工夫

1)大学教員側の視点から

２節で述べたように、合同報告会での報告資料の作成に際しては共通項目として、聞き取りを終えた後の発展的な作業として、聞き取りからわかった弥栄での実施されている対策以外に、学生や近隣都市部の住民とともに実現できそうな身近な取り組みについて、アイディアや提案をできる限り挙げてもらった。

この課題は、１年生には難しいものであった。基本的に郷づくり事業の目的とも言えるそもそもの地域問題を把握し、その対策についての理解と自らの対策を考える一連の作業をこなすだけでも十分な作業量となる。よって今回の取り組みをつうじての反省すべき点であることが確認できた。

しかし、報告資料の完成度や合同発表会におけるプレゼンテーションは１年生の時点では非常に優秀であり、２名のゼミ教員も同様に高い評価をされていた。また学生の感想からは、課題に答える以外に現地で感じた個々人の何らかの気づきがみてとれた。

このことから、与えられた課題よりも、１年生という導入段階においては特に、自由に地域に関わり、自ら興味関心を持てるテーマに対して取り組むことのほうが、継続的自主的に地域に関わってゆくことが可能であり、かつ２年以降の学習関心に繋げることができると考えられる。地域との関わり方を考えるきっかけとして、まずは、面白い、おいしい等から発展させて、個人の問題意識へと昇華させてくれることに期待したい。今後は解決が望まれる地域課題だけに目を向けるのではなく、自由に感じた事項を発展させる学習テーマを検討する必要があるといえよう。

また、３回中２回のフィールド学習では聞き取りのみではなく、イベントとのタイアップ形式で行われたこともあり、作業手伝いやイベントメニューへの参加で、聞き取りに時間を取れなかったことが課題として挙げられた。しかし逆に現地で聞き取りをする前段階として、地域に足を運び一緒に作業に取り組むという関わり方が、聞き取りへの協力体制の基礎となっていたことも今回の取り組みから伺えた。

３回のフィールド学習と報告会を終えた後、ご担当頂いた金野先生、西藤先生から、予想以上の報告成果に大いに喜んでいただき、秋学期も継続して郷づくり事業との連携をし

て頂けることとなった。年間をつうじて弥栄を学びの場として学習するゼミを確保でき、春学期で地域に出向き現状と課題を理解した学生による、秋学期の更なる取り組みが期待できる。継続性の問題という壁はあるものの、地域を学びの場とする場合には複数回現地に足を運ぶ経験を積み上げていく効果も見逃せない。

2)地域コーディネーター側の視点から

次に、地域コーディネーター側の視点から気付いた課題について考えてみたい。まず、当該年度がスタートしてからの調整となったため、フィールドワークの日程調整が遅れ、地域の方々と担当教員の双方との十分な意見交換なしに、地域のイベント・行事に合わせて、それらに学生が参加するという形態を取らざるを得なかった点である。加えて、地域に入る時の姿勢や服装についての注意事項は事前に連絡していたが、木や草が生い茂る山に入るフィールドワーク時に、一部サンダルや丈の短いズボンを着用してきた学生が見受けられ、いたるところを虫に刺され、案内人の話に集中できていない場面もあった。同様に講師が木や植物を手にとって紹介しようとしても、なかなか近づこうとしない等の様子が見られた。その結果、特に講師の気持ちを削いでしまった事もあった。

地域のなかに入り、地域の方の話を聞く姿勢を十分に伝えきれなかったのが反省点である。講師となっていただく地域の方々、教員、学生、それぞれのニーズを把握し、十分に調整を重ねた上で、フィールドワークを計画する必要がある。地域コーディネーターが双方のニーズをどのように吸い上げ、どのように企画化するかというプロセスの開示と共有が必要である。

また、１年生を対象とした講座でのフィールドワークということも影響しているのか、講師を務めていただいた地域の方々と積極的に会話する、という姿はあまりみられなかった。地域の方々も学生の興味・関心を探りながらの講義となってしまい、「学生さんは何を一番聞きたいのだろうかのぉ」と思案する講師の方もおられた。講師を務めていただく地域の方々に、十分に意図や狙いを説明しておく必要があった。

他方、２年目の牛尾氏（「ビゴル門田」）は明快に話をしてくださり、休憩時間や講義終了後には、学生３、４名が牛尾氏を囲み、意見交換している様子が見られた。学生は、弥栄や農山村での暮らしについての話題に興味がないわけではない。「わかる」講義を、講師になっていただく地域の方々と、地域コーディネーターが協働でつくり上げる必要がある。

その他、講師を務めていただいた地域の方からは、「山のことを話すならもっと奥まで入らなくちゃ。十分に説明できない」、「時間があれば、他にももっと連れていくのにのぉ」という声が聞かれた。「弥栄に来たことがないからこそ、いろいろ見せてあげたい」、「弥栄の今の課題を学生に伝えたい」という声も聞かれた。もっと深く伝えたい、十分に議論したい、という地域の方々の想いに応える工夫をいかに出来るかが、地域コーディネーターの腕の見せ所である。

3)2010年度秋学期の工夫

以上の反省をふまえ、2010年度秋学期は新たなフィールドワーク企画に挑戦している。地域の方々と協働で取り組む「商品開発企画」である。弥栄町小坂集落が立ち上げた小坂

農業生産組合の作るお米のPRとして、お米や弥栄の食材を使用した「ライスバーガー」を作る企画を調整中である。学生が実際に商品のアイディア出しから参加し、地域の人々との意見交換を交えながらライスバーガーを作る予定にしている。ただし、いきなりこのような商品開発企画が生まれたわけではなく、春学期のフィールドワーク学習で獲得した知識とそこでの出会いにふれた効果があるため、発展学習として実施が可能となっている。１年をつうじたカリキュラム設計について、また年度後半の実施状況を振り返り検討した上で、今後検討してみる必要がある。

４．地域の学生への期待と学生の地域への期待をつなぐ

(1)地域住民の学生への期待

1)事例：小角集落秋祭り

学生が地域や集落を訪れることを、地域住民の方々はどう思っているのだろうか。以下では、2010年10月23日（土）に開催された弥栄町小角集落秋祭りへボランティア参加した学生と地域住民の方々との関わりを観察した筆者（橋本）の所見を記述する。

① 概要

2010年10月23日、弥栄町小角集落にて秋祭りが行なわれた。小角集落は、2010年12月現在、世帯数17戸、人口37名、高齢化率70.27％と高齢化、過疎化が進む集落である。「近ごろ、以前は盛んだった自治会活動も少なくなり、集落内の付き合いがうすくなりつつある」、と栃原英信氏は感じていた。そこで町の集落活性化事業を活用して、集落に縁のある出身者を招いた秋祭りを開催する計画に至る。石見神楽（地元の安城社中）を招いて４年ぶりの石見神楽の上演が企画され、これに合わせて、河野克己氏寄贈の大太鼓の皮がはりかえられることとなった。

秋祭りを行なうにあたり、小角集落の自治会長である栃原英信氏の、「若いもんも一緒にてごうして（手伝って）くれないか」との想いから、弥栄支所産業課をつうじて、筆者（橋本）に相談があり、企画段階から打ち合わせに参加することとなった。栃原頼枝氏が「学生さんが一緒に料理を運んでくれたら助かるねぇ」と話されたことがきっかけで、筆者（橋本）は島根県立大学の学生２名（吉田理紗氏、山﨑遥氏）に呼びかけ、一緒に参加することになった。さらに、やさか郷づくり事務所にも応援を頼み、前日の準備から祭りに参加させていただくことになった。

吉田理紗氏は島根県立大学の１年生。ひきみボランティア制度の会員であり、弥栄町で活動する島根県立大学サークル「里山レンジャーズ」のメンバーでもある。吉田氏と筆者（橋本）は、匹見町でのボランティア活動の際に出会った。吉田氏は、春より「里山レンジャーズ」の活動で何度か弥栄町を訪れていたが、活動回数はそれほど多くなかったため、「もっと弥栄町の催しに参加したい」という想いがあったという。

山﨑遥氏は２年生。2010年５月に、県立大学内で筆者（藤本）がキャリア形成講座で講義をした際に「弥栄に行ってみたい」と声をかけてきてくれた学生である。「田んぼを見てみたい」と話し、「ボランティア活動にも興味がある」と話していた。

② 当日

朝７時、筆者は吉田氏、山﨑氏を浜田市内へ迎えに行く。早い時間の集合であったが、

二人は嫌な顔もせず明るく待っていてくれた。７時30分頃、小角集会所に到着。すでに小角集落の皆さんは会場設営や料理作りにとりかかっていた。我々３名は、栃原頼枝氏を中心とする小角のおかあさんたちに挨拶を済ませ、さっそく料理作りに加えていただいた。

任せられたのは「おにぎりづくり」。一口ほどの、丸いおにぎりを作っていく。３名の小角のおかあさんと一緒に、おにぎり１個分のご飯をよそう係とご飯をにぎる係に分かれて作業開始。私たち３名はご飯をにぎる係であったが、手際の良いおかあさんたちのスピードになかなかついていけない。しかし、「もっと手に水をつけてからにぎるとやりやすいよ」、「あんまり力を入れすぎちゃいかんよ、固くなってしまう」と横から声をかけていただき、だんだんとコツをつかむようになってきた。少し慣れてくると、「どこに住んでいるの？」、「弥栄は初めて来た？」等とおかあさんたちと県大生の間で会話をするようになった。

時折大声で笑いながら、６名で200個近くのおにぎりを作った。作り終えると、「ちょっと休憩しようや」と声をかけられ、おかあさんたちと一緒にコーヒーをいただく。小角のおかあさんたちは「若い人が一緒に手伝ってくれるとうれしいねぇ」、「孫のようだわ」と学生との「おしゃべり」を楽しんでいた。

（おかあさんたちと一緒に作ったおにぎり）

（休憩をしながらおしゃべり）

コーヒー休憩の後、筆者（橋本）は「シシ（猪）汁」づくりを、吉田氏、山﨑氏はヤマメ焼きを手伝った。シシ汁づくりは、引き続き栃原頼枝氏に指導していただいた。シシ肉を炒め、野菜を煮込んでいく。「野菜を長いこと煮込まないと、汁にいい味が出ないよ」、と教えてくださった。こんな大きな鍋で作ることに慣れていない筆者（橋本）は、栃原氏

（シシ汁づくり）

（ヤマメ焼き）

の手際の良さに圧倒されてしまった。

吉田氏、山﨑氏は、小角のおとうさんたちに習ってヤマメ焼きを担当した。ヤマメをこがさないよう、根気強くヤマメをひっくり返していく二人の姿を見て、「しっかりしてるのう」、とおとうさんたちは感心していた。

ふと顔をあげると、吉田氏、山﨑氏が徳田金美氏と話をしていた。小角集落を流れる小角川のことや、弥栄の山についての話を聞いているようだった。祭りの準備をとおして、「共に汗をかき」、二人は小角集落のなかに溶け込んでいった。

（徳田金美氏と話す吉田氏、山﨑氏）

11時頃、準備側は早めの昼食をいただいた。この時も二人は小角集落の方々に人気で、「浜田からわざわざてごうしに来てくれたのか、ありがとう」、「若い人といると元気が出るねぇ」と、二人を交えた会話が続いた。学生と楽しそうに話す小角集落の方々の笑顔が印象的であった。

11時半頃より続々と出身者の方々が集まりだし、12時より秋祭り神事が始まった。吉田氏、山﨑氏にも手伝いを終了し、神事を見学してもらった。13時からは、安城社中による石見神楽奉納が始まった。小角の秋祭りで神楽が上演されるのは4年ぶりだと言う。「やっぱり神楽の笛の音を聞かにゃ、酒がすすまんわ」、と楽しそうに話す栃原氏。「酒は弱いのであまり飲まない」と仰っていたが、この日ばかりはお酒を楽しんでいるようだ。神楽を観つつ、お酒をのみ交わしながら語り合う、賑やかな時間が始まった。

（秋祭り神事）

神楽の演目の合間で、自治会長である栃原氏が挨拶をされた。

「小角集落は、ほとんどの人間が敬老会に呼ばれるような年にあり、じいさん、ばあさ

んになって元気がなくなりつつある。そういったなか、５年前、弥栄自治区に弥栄を元気にしようとする集落活性化事業ができ、小角集落もその事業によせてもらった。担当者の方々のご心配をいただきながら、（事業で）集会所の改修や125メートルほど井戸を掘り水が飲めるようになった。今年は活性化事業５年目で終わりの年。そこで、小角から出られた出身者の方に帰ってきていただき、神楽を観ながら、昔を思い浮かべていただきながら、ひとときを過ごしていただきたいと思って秋祭りを開いた。今日、こうして賑やかな会を開くことができ、うれしく思う。」

後日、栃原氏より「あの時は話しながらちょっと泣きそうになった」、と伺った。筆者（橋本）自身も栃原氏の話に心が震えた一人である。

また、栃原氏は小角集落の担当行政職員である自治振興課・岡田氏にマイクを渡し、一言話すよう依頼した。岡田氏は、「小角は集うことを大事にしている。出身者を含めて集おうというのが秋祭り。小角は帰ってくる人を待っている。３年前、夏祭りでお弁当を作ろうという話があった。しかし、「そんなことできないよ、足も痛いし」と断っていた。それが今回は、「みんなでできることはやろうや」という流れになった。小角は変わった。この地域をどうしようかという気持ちが小角にはある。出身者を迎えることを喜びとすることができる」、と話した。

その後、徳田金美氏（小角集落）が「小角を元気づけてくれた人」として、県立大生２名を参加者の前で紹介してくださり、一言ずつ挨拶をした。「初めて小角集落に来ましたが、一緒に祭りをお祝いできてうれしいです」（吉田氏）、「こんなに長く神楽を観たのは初めてだし、賑やかな祭りに一緒に参加させていただいて楽しいです」（山﨑氏）と話した。その後も神楽が再開され、宴はさらに盛り上がっていく。

（挨拶をした時の様子）

17時を過ぎ、吉田氏、山﨑氏を市内まで送る。別れ際、小角集落の方々に帰ることを告げると、「今日はありがとう」、「またいつでも来てね」と声をかけてくださった。帰りの車のなかで、「手伝いに行ったのに、おいしいごはんをいただいて神楽も観て、後半からはお客さんのように楽しんでしまっていた」（吉田氏）、「小角集落の方々はやさしくていいひとばかりだった。おでんの大根とこんにゃくがすごく美味しかったです。特にこんにゃくは、あんなに美味しいこんにゃくは初めて食べました。また弥栄に行きたいです」（山﨑氏）と話していた。

この秋祭りが、学生の二人にとってもいい思い出となったようだ。最初のきっかけさえ

あれば、学生は自ら地域のなかに溶け込んでいき、新たな出会いや会話が生まれるのである。

2)地域住民は学生に何を期待しているのか

●集落・地域を自分の足で訪れること

学生たちと集落を訪れるとまず、「よく来たね」、「こんなところまで来てくれてありがとう」と言われることが多い。弥栄へ来てくれたことに対して喜ぶ気持ちである。「子どもの数が減り、若い人と話す機会が減ってしまった」とも聞く。地域の方々は若者と話せてとても嬉しそうな表情をする。

「弥栄が気に入ったら、また来てほしい」、小松原峰雄氏（小坂集落）はいつもこのように学生に話す。「またここに来てほしい」という期待が伺える。

●地域の現状を、よく知ってほしい

そして、「この地域の現状、問題をよく知ってほしい」とも考えている。弥畝山を案内してくださった徳田金美氏は、「自分の足で歩いて、自分の目で見ないと、本当の問題はよくわからないよ、地元のもんと話すことで、今まで知らなかったことがわかってくる」と教えてくださった。地域に入り、そこで出会った方々の話を聞くことで、地域の現状を知ってほしいと思っていると想像される。

●少し、手伝ってほしい

小角集落秋祭りの例でみたように、「ちょっとした」労働力としても期待されている。ふるさと体験村の春祭りや小角集落の秋祭りで手伝った際は地域の方に大変喜ばれた。「あと少しの手伝い」があれば可能になる事を手助けすることで、学生は地域を勇気づける事が出来る。

(2)学生は何を感じ、何を学ぶのか：「フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク」を終えての学生の感想、意識の変化についての所見

フィールド学習およびその報告会をつうじて、学生が課題以外に自ら感じ、学んだことがうかがえる箇所が幾つかあった。

例えば地域課題の理解を目的とした課題の答えに対して、あるグループは最大の課題は「地域を好きになること」と発表した。また、弥畝山散策に参加した学生は、森林が人の生活に不可欠な機能を果たしていると報告し、日常生活における「当たり前」の成立前提やその仕組みにあらためて気づいたという発言があった。同様に公刊データや世間で耳にする「事実」と実際に感じたことの違いを述べている学生もいた。

弥栄を訪れて、学生たちが地元の人々の視点に近づきつつも、自らの視点で何が課題でそのために何が必要なのかを、自己の体験をつうじて察知したことが報告会で看守できた。

聞き取りの目的や課題にとらわれず課題の枠を超えたテーマについて各自が地域と関わり、学習テーマを育てていくことが、フィールド学習の効果として重要となる。

(3)小括

1)チームによるコーディネート体制の重要性

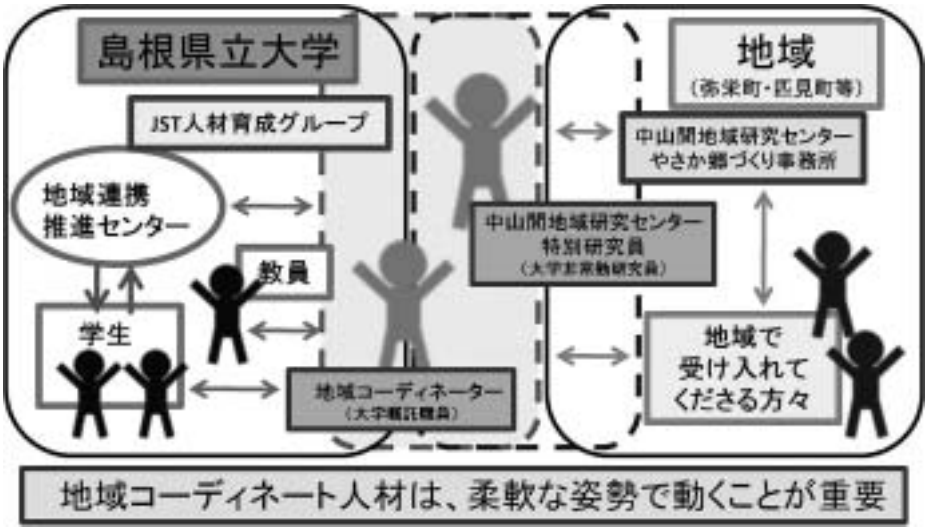
第２節で検討してきたように、地域コーディネーターのコーディネートにより、大学教員が面識のない、日頃からの付き合いがない地域でのフィールドワークを実施することができた事は画期的な成果であると考えられる。

今回のような丁寧かつ柔軟なフィールドワークが実施できたのも、大学と地域を調整する「つなぎ役」（藤本、橋本）が、フィールドワーク実施地域（弥栄町）に暮らしており、日頃から「共に汗をかく」、「暮らしを共有する」なかで、信頼を確保していた点が大きいと言える。「つなぎ役」には、ある時には地域の側に立ち、またある時には大学の側に立つ、柔軟な姿勢で動く高度な調整能力が求められると考えられる。そのためには、一人で行なうのではなく、違う役割を果たす二人の調整体制（＝チームによるコーディネート体制）が必要であるとの結論に筆者（藤本、橋本）は至った。（**図３**参照）

橋本・藤本，2011でも述べたように、2010年度前半では、同じ時期に二地域（浜田市弥栄町と益田市匹見町）での社会実験が行なわれた。地域での祭りやイベントは同時期に行なわれることが多く、日程が重なることもしばしばであった[6]。その際は、手分けせざるを得ず、匹見町を主に橋本が担当し、弥栄町を主に藤本が担当し、分担調整を行なった。また、イベントや行事は土・日・祝日に行なわれる事が多いため、二人とも休みをとることがなかなか出来ない事が続いた。

「信頼構築・企画・調整・実施・報告・アフターフォロー」のサイクルを一つひとつの企画に対して行なう事が重要であり、非常に手間がかかる。弥栄町地域マネージャーの皆田氏は、地域マネージャーの仕事を「各駅停車の列車のようなもの」と話していた。これは地域マネージャーを列車に、地域の方々の家を駅にみたて、集落や地域と関わる仕事を続ければ続けるほど「停車駅の数が増え、停車時間も長くなる」事を意味している（笠松，2010: 63頁）。

図３　地域と大学の間をつなぐ地域コーディネート人材の役割[7]



さらに、調整を行なうなかで筆者（藤本・橋本）が心がけたことは、ただ用件を済ませるだけではなく、少しだけでもいいから「日常の作業を共に行ない、共に汗を流す」事である[8)]。２人が暮らす弥栄町では、自分たちが暮らす集落だけではなく、様々な集落での草刈りやボランティア、イベント支援等に可能な限り出かけていった。匹見町でも、ボランティア要請、作業支援要請がある度に、橋本を中心に参加した[9)]。

これら地域行事への参加や作業支援、ボランティア参加は、筆者（藤本）が、前任の平石氏と共に始めた事である。平石氏の退任が決まり、橋本が着任する前の研修・引継ぎ期間（2010年２・３月）では、藤本、平石、橋本の３人でこれらの活動へ参加する機会を作り、次年度からの引き継ぎを行なう事で、「人が変わっても、やることは変わらない」という事を地域の方々に訴え続けた。

2)地域再生支援員との綿密かつ日常的な連携

地域内との調整は、コーディネーターだけで出来たのではない。弥栄町では郷づくり事務所スタッフ（常駐：４名、非常勤：４名、2010年12月現在）との協働、匹見町では匹見町まちづくりコーディネーター（石橋氏）との密な連携により初めて可能であった。したがって、今後、多地域展開していく際には、まず、地域内の「つなぎ役」との連携が必要となる。地域内の集落支援員、地域マネージャー、または公民館主事や小・中学校の教員等、地域内のつなぎ役となっている人物との連携構築を基礎に、地域コーディネート体制を構築することとなる。

しかしながら、結局、「日常から関わり、共に汗を流す」ことが信頼構築の基盤となる以上、連携対象地域が増える毎に、地域コーディネーター増員の必要は否めない。島根県の場合は、島根県中山間地域研究センターに常駐している里山プランナーとの連携や地元市町村職員との関係構築と役割分担も視野に入れ、今後の可能性を模索したい。これまで述べてきたように、「大学と地域との連携」の実現には、膨大な人的・社会的コストがかかって初めて可能である事をまずは、認識し、出発点にしなければならない。

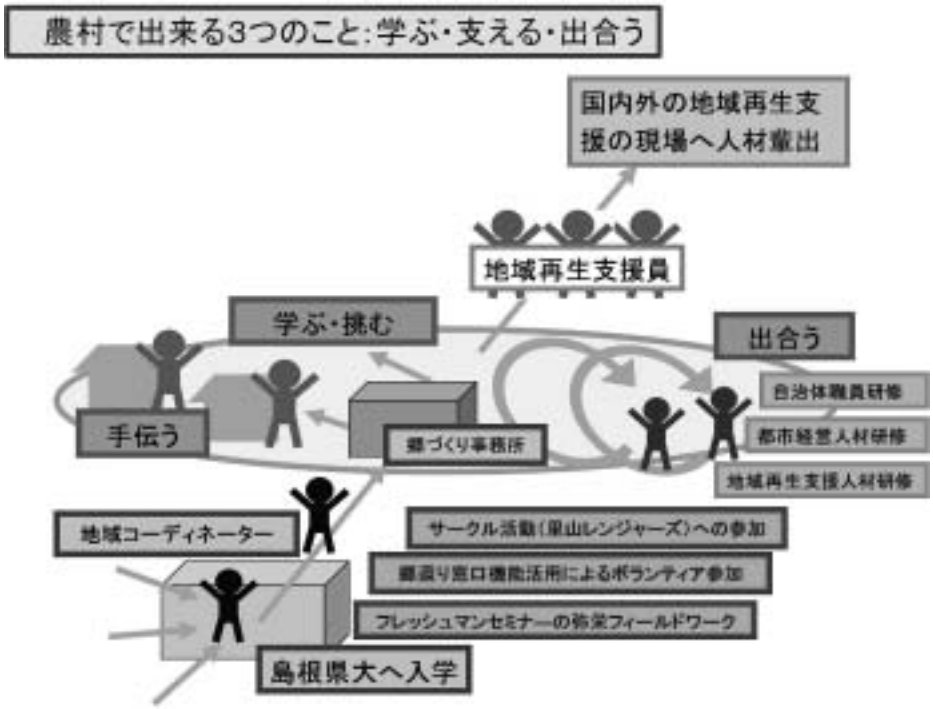
むすびにかえて：大学と地域との協働による地域支援人材育成拠点形成へ向けて

郷づくり事業では、中山間地域への人口還流を促進し、「元気な人々で賑わう脱温暖化の郷・弥栄」の実現という持続可能な中山間地域再生戦略の総合的な構築が研究開発目標とされている。島根県立大学JST人材育成グループの役割は、「弥栄で人が育つようにする」ことの達成である。まずは、地域コーディネーターの配置により、弥栄に関心を持ち、弥栄に人々を招き入れること（＝郷還り窓口機能の設置）から始め、脱温暖化・地域支援人材育成プログラムを構築し、人材育成拠点を形成することが到達目標となる。本稿を閉じるにあたり、①中山間地域への交流人口増加、②学生への教育効果についてまとめておきたい。

① 中山間地域への交流人口増加

取り掛かりとして、2009年９月の地域コーディネーターの配置以来、現在（2010年12月）までに「フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク」（平石・橋本）：62名、「国際理解教育の推進」（平石）：15名、「レンジャーOJT」（平石）[10)]：22名、「島根県立大学21

図４　大学と地域との連携・協働のために必要な３つのこと：学ぶ・手伝う・出合う



世紀地球講座―弥栄編」（橋本）：126名、「郷還り窓口機能によるボランティア参加」（橋本）：６名の人々が、弥栄の大地を自らの足で踏みしめている（カッコ内は地域コーディネーターの担当者、数値は延べ人数）。

② 学生への教育効果－ボランティア参加への展開

本稿で中心的に事例検討してきた「フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク」では、地域に関心を持ち、自らの足で当該地域を訪れ、地域の現実に五感を駆動し、地域に根ざして生きてきた人々の生きざまに触れるきっかけづくりを行ない、さらに関心をもった学生に対しては、ボランティア参加出来る仕組みを構築してきた（例えば第４節（１））。学生たちは、地域という舞台で自ら経験し、①出合う、②手伝う、③学び、挑むの３つを、「共に汗をかきながら」学んでいく。（**図４**参照）

この取り組みは、まだまだ端緒についたばかりであり、このプログラムを経た人物がどのようなキャリアをデザインするかはこれからである。しかしながら、「大学と地域」の接点づくりをきっかけとして、学生と住民のかけがえのない出合いが生まれ、学生は様々な生き方や多様な自然との関わりのなかで驚き、発見する、これらの経験が、生きる手ごたえとなり、物事を判断する、決断する際の一つの基準となるであろう。「弥栄で人が育つようにする」ことの実現にむけて、さらなる歩みを進めていきたい。

注

1）現場レベルで実績を生み出しつつあった人的支援による集落支援、地域再生支援の仕組みが、国レベルでの政策形成を促し、現在は「集落支援員」、「地域おこし協力隊」（ともに総務省）として制度化されている。島根県中山間地域研究センターが採用する「里山プランナー」も全国に先駆けた実践であり、国レベルでの政策形成のモデルのひとつとされた。この点については、『農業と経済 2010年10月号』で組まれた特集「生き残りをつかむ集落支援」に詳しい。

なお本稿では、これらの集落支援、地域再生支援を職務とする人材の総称として、「地域再生支援員」と呼ぶ。

2）匹見町まちづくりコーディネーターについては、藤本, 2010a、橋本・藤本, 2011に詳しい。

3）弥栄町地域マネージャーについては、国土交通省国土計画局・島根県, 2008、皆田, 2010、藤本, 2010cに詳しい。

4）韓国には、「専門契約職公務員」制度がある（東京財団政策研究部, 2009）。本制度は、専門性を備えた人材を一定期間、地方公務員として採用するもので、1987年に設けられ、1991年の地方公務員法改正で本格化された。2008年度は、3009人が従事したという（東京財団政策研究部, 2009: 14頁）。大変興味深い制度であり、今後さらなる検討を深めたい。

5）詳しくは、藤本, 2010b、2010dを参照。

6）並行して、島根県立大学公開講座「島根で暮らす、環境共生という生き方」の企画・実施を行なっており、業務を分担しての協働作業は必須であった。

表6　島根県立大学公開講座「島根で暮らす、環境共生という生き方」の概要と参加者数

年度	内　　容	日にち	講　　師	参加人数	備　考
2010年度	「島根で暮らす、環境共生という生き方」1－『「島根で暮らす、環境共生という生き方」への招待』	5月14日	藤本穣彦氏	60	
	「島根で暮らす、環境共生という生き方」2－「日本の農村、これからどうなる？どうする？－日本とアジアの村々を歩き続けて」	5月28日	大野和興氏	53	弥栄町での開催
	「島根で暮らす、環境共生という生き方」3－「弥畝山から考える、弥栄のこれまでとこれから」	6月12日	福島万紀氏 ※徳田金美氏 ※佐々本道夫氏 ※三浦香氏	38	弥栄町での開催 ※地域の方が講師に
	「島根で暮らす、環境共生という生き方」4－『「次の世代」に伝えたい、弥栄に生きる農家の「声」と「想い」』	6月25日	相川陽一氏 ※串崎文平氏 ※新庄暢氏 ※横山真生氏	36	※地域の方が講師に
	「島根で暮らす、環境共生という生き方」5－『農や自然とのかかわりから考える、「よく生きる」ことの探求と継承』	7月17日	竹之内裕文氏	35	弥栄町での開催

7）島根県立大学地域連携推進センターと学生、地域コーディネーターとの関係は、橋本・藤本, 2011を参照のこと。

8）この点についても皆田氏からの助言や、皆田氏との仕事から学ぶところが多かった。

9）表7のように、筆者（橋本）は、日頃から匹見町でのボランティア・イベント参加を続けている。詳細は、橋本・藤本, 2011を参照。

10）レンジャーOJTについては、藤本, 2010bを参照のこと。

表７　匹見町でのボランティア、イベント活動参加実績

年	月	日	内　容	事　　項	参　加　者
2009	12	9	ボランティア	とちの実交流会･「小学生体験」イベント活動支援	藤本･平石
2010	1	27	イベント	匹見上公民館・真冬の匹見カマクラ体験	藤本･平石
	3	20	田舎体験	三葛地区・ワサビイベント	藤本･平石･橋本
	4	18	イベント	安蔵寺山登山	藤本･橋本
		23	ボランティア	道川地区元組集落・集会場周辺整備	橋本
	5	3	ボランティア	匹見峡春まつり支援	藤本･橋本
	6	4	ボランティア	萬葉の郷・周辺整備	橋本
		5	田舎体験	内谷集落・ワサビイベント	橋本
		20	ボランティア	道川地区元組集落・側溝清掃	橋本
	7	24	田舎体験	広瀬山菜グループ・川遊びイベント	橋本
	8	17～18	ボランティア	田中学習会「田舎体験学習旅行」支援	橋本

引用・参考文献

藤本穣彦, 2010a,「人的支援をつうじた地域再生施策の展開と可能性―益田市匹見町を事例として」, 島根県立大学JST人材育成グループ編,『島根で暮らす、環境共生という生き方―地球規模の環境危機へ、地域からのアプローチ』, 山陰中央新報社: 57頁-62頁.

―――, 2010b,「地域を支える「公共人材」の育成に、地域がとりくむ―浜田市弥栄自治区の実践から」, 島根県立大学JST人材育成グループ編,『島根で暮らす、環境共生という生き方―地球規模の環境危機へ、地域からのアプローチ』, 山陰中央新報社: 66頁-74頁.

―――, 2010c,「人材配置による集落支援制度の可能性と課題―モデルとなった島根の事例から」,『農業と経済　2010年10月号』, 昭和堂: 25頁-34頁.

―――, 2010d,「HGカンボジア―日本青少年大使」, ハート・オブ・ゴールド10周年記念誌編集員会編,『共に育つ―ハート・オブ・ゴールド10年の歩み』, 山陽新聞グループ山陽印刷株式会社: 46頁-47頁.

藤本穣彦・田中恭子・平石純一, 2010,「中山間地域の担い手不在問題―ボランティア・大学生の可能性」, 島根県立大学総合政策学会編,『総合政策論叢』19: 67頁-81頁.

橋本文子・藤本穣彦, 2011,「ボランティアコーディネートをつうじた中山間地域再生の可能性―ひきみボランティア活動支援事業を事例として」, 島根県立大学総合政策学会編,『総合政策論叢』20: 97頁-118頁.

笠松浩樹, 2009,「小規模高齢化集落の再生へ向けて」,『島根県中山間地域研究センター研究報告書』第５号: 73頁-76頁.（初出：2008,『しまね農政研』324号, 島根農政研究会）.

―――, 2010,「地域のなかでであった言葉」,『NPO活動推進自治体フォーラム島根大会―いきいきとした地域社会の創造をめざして（大会資料集）』, 島根県環境生活部環境生活総務課NPO活動推進室: 63頁.

国土交通省国土計画局・島根県, 2008,『維持・存続が危ぶまれる集落の新たな地域運営と資源活用に関する方策検討調査報告書』.

小松隆二, 2007,「はしがき」, 伊藤眞知子・大歳恒彦・小松隆二編,『大学地域論のフロンティア―大学まちづくりの展開』, 論創社: ⅲ頁-ⅷ頁.

皆田潔, 2010,「地域を知り、繋ぎ、支えることを仕事に―地域マネージャーとなって」, 島根県立大学JST人材育成グループ編,『島根で暮らす、環境共生という生き方―地球規模の環境危機へ、地域からのアプローチ』, 山陰中央新報社: 63頁-65頁.
小田切徳美, 2010,「新たな集落支援政策の課題」,『農業と経済　2010年10月号』, 昭和堂: 5頁-15頁.
大宮登・原田寛明, 2007,「はじめに」, 大宮登・増田正編, 『大学と連携した地域再生戦略―地域が大学を育て、大学が地域を育てる』, ぎょうせい: ⅰ頁-ⅳ頁.
関原剛, 2008,「未来への卵―新しいクニのかたち」, かみえちご山里ファン倶楽部編,『未来への卵―新しいクニのかたち』, かみえちご地域資源機構株式会社: 245頁-286頁.
東京財団政策研究部, 2009,『専門人材の恒常的な確保による地域再生――「地域再生仕事人」の活用』
『農業と経済　2010年10月号（特集：生き残りをつかむ集落支援）』, 昭和堂.

謝辞

本稿で記述した活動では、浜田市弥栄町の皆様をはじめ、多くの方々にご協力いただきました。徳田金美様（弥栄町小角集落）、三浦香様（弥栄町錦ケ岡集落）、佐々本道夫様（弥栄町山賀集落）、牛尾英昭様（弥栄町門田集落）、栃原英信・頼枝様、（弥栄町小角集落）、小松原峰雄様（弥栄町小坂集落）、弥栄町小角集落の皆さま、弥栄町門田集落の皆さま、ふるさと体験村春祭り実行委員会の皆さま、長田英雄様（ふるさと体験村）、福島万紀様（やさか郷づくり事務所）、岡田浄様（浜田市弥栄支所・弥栄町稲代集落）、新開智子様（浜田市弥栄支所）。また、島根県立大学の藤原眞砂先生、金野和弘先生、西藤真一先生、吉田理紗様（学生）、山﨑遥様（学生）、山陰中央新報社の園慎太郎様にも大変なご協力をいただきました。さらに、本稿をまとめるにあたり、笠松浩樹様（島根県中山間地域研究センター 専門研究員）と諸岡了介先生（島根大学教育学部 准教授）にご助言をいただきました。ここに記して謝辞とさせていただきます。（掲載順不同）

付記：本研究は、（独）科学技術振興機構社会技術研究開発センターの研究開発事業「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷』づくり」（研究代表：藤山浩）と（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「地域社会にみる死生観の現在に関する複合的研究」（研究代表：諸岡了介）の成果の一部である。

キーワード：地域再生支援員　地域コーディネーター　初年次教育
ボランティア　大学と地域との連携

（Fujimoto Tokihiko, Tanaka Yukiko and Hashimoto Ayako）